

## ダニエル書 - 第九十三番

ローマの予言的三部作を明らかにする：古代異教から現代の欺瞞まで

Jeff Pippenger

2024-02-26

ダニエル書は、幻を確立するのがローマであることを示しており、その理解は、ウィリアム・ミラーがこの事実を明らかにしたとき、ミラー運動の時代のプロテスタントたちに反対された。終わりの時代においても、幻を確立するのは依然としてローマであり、今日、ラオデキア的アドベンチズムは「あなたの民を略奪する者たちはアンティオコス・エピファネスである」という墮落したプロテスタントの見解を支持している。ミラー運動の時代に退けられつつあった契約の民は、まさに同じ真理に抵抗したが、今、退けられつつある終わりの時代の契約の民も、その同じ真理に抵抗している。ソロモンはうまく言い表している：

かつてあったことは、これからもあることであり、すでに行われたことは、これからも行われることである。日の下に新しいものは何もない。「見よ、これは新しい」と言えるものがあるだろうか。それは私たちの前に、昔からすでにあったのだ。伝道者の書 1:9、10。

預言的に見れば、ローマには三つの形態があり、最初の二つの形態が第三の特徴を明らかにする。なぜなら、真理は二人の証言に基づいて確立されるからである。

しかし、もし彼があなたに耳を貸さないなら、もう一人か二人を連れて行きなさい。二人または三人の証人の口によって、すべての事が確認されるためである。マタイ 18:16。

異教ローマの宗教は異教であり、異教は真の宗教の模造品である。偽札のような意味での偽造というよりも、というのも異教は実際には真の宗教とはまったく似ていないからである。しかし預言的観点から見ると、それにはまがい物としての特徴がある。ローマの都はエルサレムの模造であり、そこにはエルサレムの神殿の模造であった神殿（パンテオン）がある。異教の宗教的実践は聖別されておらず悪魔的であるが、それらはサタンによるまがい物の宗教的実践を表している。異教ローマの宗教の長はポンティフェクス・マクシムスと称された。「Pontifex Maximus」は、もともと古代ローマの国家宗教における最高神官を指し、その起源はローマ共和政初期に遡る。時とともにこの称号は政治的・宗教的権威と結び付けられるようになり、やがて、今日ではローマ・カトリック教会で教皇が用いる称号となった。

異教のローマにおける最高祭司の称号はポンティフェクス・マクシムスであり、これは教皇ローマの最高祭司の称号でもあった。また、これは「最高教皇のうち最も偉大な者」を意味するラテン語の語である。彼はローマの国家宗教、特に神ユピテルの崇拝の最高祭司であった。ポンティフェクス・マクシムスは、さまざまな宗教儀式的監督や、ローマの宗教暦が適切に機能することを確保することなど、重要な宗教的権威と職責を有していた。ポンティフェクス・マクシムスはまた、ローマ宗教の儀礼の解釈と維持に責任を負う

司祭団である神祇官団 (Collegium Pontificum) の長であった。

異教ローマと教皇ローマの最高司祭はいずれもポンティフェクス・マキシムスであった。したがって、現代ローマの指導者の称号も当然ポンティフェクス・マキシムスとなる。異教ローマの宗教は異教であり、教皇ローマの宗教も、かつて今も、キリスト教を標榜しながら実際には異教であり、そして終末時の現代ローマの宗教も、キリスト教を標榜することで覆い隠された異教となる。

異教ローマと教皇ローマの双方には、絶対的な支配を行う特定の期間が定められていた。異教ローマは、ダニエル書11章24節の時の預言の成就として、三百六十年間にわたり絶対的に支配するとされていた。

彼は、その州の最も豊かな所にさえ平穩に入り、彼の父祖もその父祖も行わなかったことを行い、彼らの間に獲物と戦利品と富を散らし、さらに、しばらくの間、堅固な要塞に対して自らの計略をめぐらすであろう。ダニエル書 11:24.

二十四節の主題は異教ローマである。彼らは十六節で主題となり、三十一節まで主題であり続ける。これらの節については今後の記事で具体的に扱うが、ここでは、予言が、ローマが「堅固な要塞に対してその計略をめぐらし、しかも一つの時のあいだ」と表現されていることによって、異教ローマが三百六十年間絶対的に支配することを示している点を指摘しておく。ここで「against」と訳されている語は実際には「from」を意味しており、その節は、ローマが「堅固な要塞」、すなわちローマ市「から」世界を指揮し、それを「一つの時」、つまり三百六十年間行うだろうと述べている。

異教ローマは、紀元前31年のアクティウムの海戦で覇権を握り、西暦330年、コンスタンティヌスが帝国の首都を、ローマ市という強固な拠点からコンスタンティノープル市へ移すまで、絶対的な支配を続けた。その後、帝国は悪名高い衰退を始めた。ローマ市は異教ローマにとって予言的な「強固な拠点」であり、その都から支配していた間は無敵であった。コンスタンティヌスの権力移譲に続く戦争において、ローマ市は、ゲンセリックと侵入してきた蛮族諸部族の攻撃の的となった。彼らは黙示録第8章の最初の四つのラッパによって表されている。

このため、ダニエル書11章31節では、教皇権のために立ち上がった「腕」（異教ローマ）が、まず「力の聖所」を汚したとある。ローマの都は、異教ローマと教皇ローマの双方にとって予言的な「力の聖所」である。というのも、330年に異教の権威がコンスタンティノープルへ移されたことで、台頭しつつあった教皇ローマにローマの都が残されたからである。このため、黙示録13章2節は、竜（異教ローマ）が教皇ローマにその「座」を与えたと言う。「座」とは権力が支配する場所のことであり、538年から1798年にかけて、教皇ローマは、かつて異教ローマが「ひととき」の間至高の支配をふるったのと同様に、至高の支配を行った。

預言は、異教ローマと教皇ローマの双方が至上の支配を行うことになる特定の期間を示しており、その支配は、その権威の座であるローマ市から行使されるとする。異教ローマがローマ市を離れたとき、その無敵は終わり、二十四節で「一時」として表される三百六十年の終わりを画した。そして1798年に教皇支配の千二百六十年が終わったとき、ナポ

レオンは教皇をローマ市から連行させ、彼は流刑の身のまま死去した。

異教ローマと教皇ローマは、終末において現代のローマが特定の預言的期間、絶対的な支配を行うことを示している。「時はもはやない」。しかし、終末における教皇権の迫害の期間は、間もなくアメリカ合衆国で制定される日曜令から始まり、人類への猶予期間が閉じられるまで続く。そのときミカエルが立ち上がり、こう宣言する。「不義なる者はなお不義を行わせよ。汚れた者はなお汚れたままでおれ。義なる者はなお義を行い、聖なる者はなお聖くあれ。」

異教のローマは、その血塗られた歴史の中で、ローマ市のコロッセオでキリスト教徒を迫害した。キリスト教の歴史家たちは、教皇支配の暗黒時代に教皇庁によって1億人の殉教者が殺害されたと推定しているが、教皇庁はその主張を否定し、推計を約5,000万人としている。異教ローマも教皇ローマも神に忠実な人々を迫害したが、現代のローマもまた終わりの日に神に忠実な人々を迫害するだろう。

「多くは投獄され、多くは命からがら都市や町から逃げ出し、また多くは、真理を擁護して立つがゆえにキリストのために殉教者となるだろう。」『Selected Messages』第3巻、397ページ。

異教ローマは、世界の支配権を握る過程で三つの地理的障害を克服した。教皇ローマも、世界の支配権を握る過程で三つの地理的障害を克服した。現代のローマは1989年に南の王（無神論のソビエト連邦）を打ち破り、間もなく到来する日曜法の際に次に栄光の地（アメリカ合衆国）を打倒するだろう。さらにその後、エジプト（全世界）をも征服する。

社会全体が、従う者と従わない者という二つの大きな階級に分かれつつある。私たちはどちらの階級に属すると見なされるのだろうか？

神の戒めを守り、人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るすべての御言葉によって生きる者たちが、生ける神の教会を成している。反キリストに従うことを選ぶ者は、大背教者の臣民である。サタンの旗印の下に並び立ち、彼らは神の律法を破り、他の人々にもそれを破らせる。彼らは、人々が神の御国の律法を踏みじることによって地上の政府への忠誠を示すようになるよう、諸国の法をそのように整えようと努める。

サタンは、重要でない問いで人々の心を逸らし、きわめて重要な事柄を明確にはっきりと見えないようにしている。敵は世界を罠にかけようと企んでいる。

いわゆるキリスト教世界は、重大で決定的な行動が展開される舞台となるであろう。権威ある人々は、教皇制の先例に倣って、良心を拘束する法律を制定するであろう。バビロンは、彼女の淫行の怒りのぶどう酒を、すべての国々に飲ませるであろう。すべての国が巻き込まれるであろう。『Manuscript Releases』第1巻、296頁。

ダニエル書11章41節の“栄光の地”をアメリカ合衆国の象徴と見なすという真理を擁護するために、ユダ族の獅子は、終わりの時代の預言の研究者たちに、預言の三重適用の原則を啓示した。章の最後の六節からの光は、ダニエル書において“the daily”によって表され、ダニエル書11章31節に示されている歴史を、この章の最後の六節に適用することによって確立されてきた。ミラーの預言的枠組みの鍵となったのと同じ基礎的真理（

“the daily” ) は、終わりの時代の預言的枠組みも生み出した。ミラーの枠組みは、神の民を迫害した異教主義と教皇主義という二つの荒廃の力に基づいており、終わりの時代の枠組みは、終わりの時代に神の民を迫害する三つの荒廃の力に基づいている。

ダニエル書11章の最後の六節に描かれている知識の増加は、1989年に到来した知識の増加を指し、またヒデケル川によっても象徴されているが、その知識の増加は真理の敵によって抵抗を受けた。その抵抗は、預言の三重適用という原則の理解へと導いた。これは最初にローマの三重適用として認識され、このローマの三重適用こそが、預言史のビジョンを確立する主題である。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18.

ローマの三つの様相に対する三重の適用は、異教ローマと教皇ローマの宗教が異教であり、その宗教が Pontifex Maximus という称号を持つ一人の男によって統治されていることを示している。その二つの様相は、彼らが特定の期間、至高の支配を行うに先立って三つの地理的勢力が取り除かれること、また、彼らの力の聖所である七つの丘の都ローマから彼らが支配することを示している。両者はいずれも、神に忠実な民を迫害したという事実を証言している。ゆえに、この二つの証言に基づいて、現代のローマの宗教は異教となり、Pontifex Maximus という称号を持つローマの教皇によって導かれることを私たちは知る。

大淫婦が支配権を掌握して絶対的に支配する前に、現代のローマは三つの障害を克服する必要がある。第一の障害は1989年のソ連崩壊という過去の出来事であり、ソ連はヨーロッパにおいてローマの権力に抵抗した無神論の敵であった。次の障害は、間もなく米国で制定される日曜法によって打ち倒され、その後、国際連合はしばらくの間、自らの権威を現代のローマに与えるだろう。現代のローマが完全に権勢を確立すると、終末の迫害が行われる。

ダニエル書、特に黙示録8章は、ローマの予言的特徴を示しており、それらは現代のローマの正しい理解に資する。そうした特徴の一つは、西暦330年にコンスタンティヌスによって成し遂げられたローマ帝国の東西分割であった。異教ローマと教皇ローマを併せて考えると、ローマの二重の性格についても語っている。西ローマと東ローマを生み出したコンスタンティヌスの分割は、異教ローマと教皇ローマに対する第二の証しである。コンスタンティヌスは東において世俗の権威を確立し、西には教会の権威を残した。異教ローマは国家権力を、教皇ローマは教会権力を体現した。東は国家権力、西は教会権力であり、これはダニエル書2章の鉄と粘土、ダニエル書8章の雄の角と雌の角、さらにはダニエル書7章の猛獣とダニエル書8章の聖所の獣によって象徴されている。

現代のローマは、教会と国家、鉄と粘土、そして宗教権力と国家権力の結合から成る二重の性質をもつが、同時に三重の性質ももつ。黙示録第8章では、西ローマと東ローマの双方が、文字通りにも象徴的にも三つに分けられた。東ローマから統治していたコンスタンティヌスは王国を実際に三人の息子に分割し、西ローマは太陽・月・星によって象徴的に表され、これはローマ帝国が採用していた三重の統治形態を表していた。ゆえに、現代のローマは、宗教権力と国家権力という二重の性質を持ちながらも、竜と獣と偽預言

者によって表される三重の結合をも表す。

異教ローマと教皇ローマの諸相は、終末期の現代ローマの複雑な預言的構成を明らかにする。間もなく到来する日曜法において起こる三重の連合こそが、世界をハルマゲドンへと導く。それは全世界的な「獣の像」であり、政教一致の象徴である。その頭はポンティフェクス・マクシムスで、彼は自らの権力の座であるローマの都から支配する。「罪の人」の世俗的権威は国際連合によって与えられ、世界はアメリカ合衆国の強制力によって、三重にしてなお二重の反キリストの体制を受け入れさせられる。ゆえに、ちょうど黙示録十三章二節で異教ローマ（竜）が教皇制に「自分の力と座と大いなる権威」を与えたように、異教ローマの型としてのアメリカ合衆国は、現代ローマのために同じ三つの働きを成し遂げる。「座」は七つの丘の都ローマにあるバチカン市国、「権威」は国際連合、「力」はアメリカ合衆国である。こうして彼らは共に、教皇制が「その終わりに至り、彼を助ける者はない」ところへ世界を導く。

次回の記事でこの研究を続けます。

そして第六の御使いが、その鉢を大河ユーフラテスに注ぎ出した。すると、その水は涸れ、東から来る王たちのために道が備えられるようになった。わたしはまた、蛙のような三つの汚れた霊が、竜の口から、獣の口から、偽預言者の口から出てくるのを見た。彼らはしるしを行う悪霊の霊であって、全能の神の大いなる日の戦いに彼らを集めるために、地上の王たち、すなわち全世界の王たちのもとへ出て行くのである。見よ、わたしは盗人のように来る。目をさまして衣を守っている者は幸いである。裸で歩くことになって、その恥を見られることのないためである。そして彼は、ヘブライ語でアルマゲドンと呼ばれる場所に彼らを集めた。第七の御使いがその鉢を空中に注ぎ出した。すると、天にある神殿から、すなわち御座から、「事は成った」という大きな声がした。黙示録 16:12-17